

DEITEX プロジェクトを振り返って

1. プロジェクトとしての DEITEX

国土面積は我が国の半分ほどで人口は約 2 千万人、全体に平坦とはいえ多くは半沙漠で決して恵まれた地勢にあるとはいえないシリアである。一方で、古代からの様々な遺跡を残し、いたるところに古代文明の威風と気高さを偲ばせる。訪れた誰もが気に入ってしまうその風土や料理の数々、そして日本人とどこか共通する細やかな心情溢れるシリアの人々、そんなシリアで DEITEX プロジェクトは進められてきた。正式には「シリア国節水灌漑農業普及計画プロジェクト」と称し、我が国技術協力プロジェクトとして 2005 年 4 月から本年 7 月まで、フェーズ 1、2 プロジェクトとして実施され AAI はそのすべての活動に関わってきた。

昨今では「シリアは内戦状態！」と報道されている。以前のシリアとは別世界のこんな情況に陥ったシリアへの個人的な想いは深いし、平和到来を望む気持ちは人一倍強い。ここではシリアで実施された私たちの DEITEX を、当事者としての立場から振り返る。

乾燥地では特にそうであるように、シリアでも「水」の確保は住民の最重要かつ切実な大テーマである。シリア最大の都市ダマスカスを見ても、オスマン帝国統治当時（16 世紀）に 5 万人余であった住民人口が、現在、首都圏全体で 400 万人にのぼり、さすがのオアシス「エデンの園」も水供給に困窮している。その他地域ももともと首都ほどに水に恵まれていたわけではなく、「水」の確保が歴史を貫く重要な課題であり続けた。



シリアの伝統的灌漑風景(左はジグザグ灌漑、右は水盤灌漑)

年平均降雨量は 250mm 程度と寡少な上に、国を縦断するユーフラテス川は豊かな水量を誇るとはいえ、国際河川ゆえに利水協定のハードルは極めて高い。シリアでは、90 年代に井戸ポンプが普及しだすと急速に自家井戸が増加した。この時期は、まさに灌漑面積が全国的に急増した時期と重なるが、同時にいたるとこ

ろで地下水位の低下や、涸れ井戸が目立ってきた。明らかに過剰な汲み上げが原因であり、このまま放置すれば国中の地下水が枯渇しかねない事態となった。

ここで、シリアの水需要の約 9 割は灌漑目的であることから、シリア政府は、この水困窮事情を「灌漑の節水」を進めることで緩和することとし、我が国政府にその技術協力（DEITEX の実施協力）を要請してきた。

「灌漑の節水」はどのように進められるのだろうか。各農家が灌漑使用水量を適量とするように、「アメとムチ」を使って強制するのが最も近道のように見える。実際、シリアでも様々な利水規制や罰則を設けてみたが、節水は一向に進まないのである。「社会的ジレンマ」論によれば、人々を何らかの社会的行動（ここでは節水）に誘導・強制するためには、莫大な「監視と統制のコスト」がかかる上に自発性が減退することが多いという。シリアでも、常時の徹底した節水監視・規制だけではとても現実的でないことが明らかになった。

過剰利水の理由はいろいろ考えられる。「無駄な水利用を改善する方法を知らない」、「そもそも無駄に水を使っていることすら知らない」、あるいは、それは承知の上で、「自分にとってはそのほうが得だから見直さない」等々、さまざまであろう。しかしそうであれば、知らない人には知ってもらえばよい、また、承知して水を無駄に使う人には、それが「実は得にならないこと」に目覚めてもらえばよい。DEITEX は、いずれの事情にあるにしろ、各灌漑農家への様々な普及活動を通して各農家が納得して節水を選択するようになれば、それが最も「堅実で持続的な方法」と考えた。また、普及すべき節水灌漑の様式や方法が「得」なものであるならば、確実に農家に広がると考えた。このために DEITEX では、「伝統的灌漑からの近代化」はそのまま節水灌漑にもつながり、農家への様々なインセンティブを有することを確認した上で、各農家の実情に適った方法や運用形態を取る近代的節水灌漑を「普及活動」を通じて広めていくことにした。

プロジェクト活動は、「既存近代灌漑技術を見直し不足技術があれば補うこと」、「その普及を実際に担っていく人材を育成すること」、そして「育成された人材が進めるべき効果的な普及活動の方法とシステムを示し定着させること」と定めた。特に研修・普及活動では、従来の教訓から、農家ニーズにそった明確な目標設定に基づく実践重視型の連携展開を目指した。

DEITEX プロジェクトを振り返って (続)

2. プロジェクトを通じて達成したこと、学んだこと

DEITEX は、フェーズ1は特に灌漑過剰利水が顕著な3県で、フェーズ2はそれらに北部2県を加えた5県で、上記のように「試験研究」「研修」「普及」の各分野で成果を生み、節水灌漑を進めてきた。節水灌漑を広め切ったとはいえないが、プロジェクトサイトでの節水達成に加えて、節水灌漑が自立発展的に進展していく仕組みが作られ、定着されたと考えている。

試験研究面では、もともとシリアに存在していた近代節水灌漑の技術・経験・情報を整理して、デモ圃場での実証や追加的試験研究も行いながら農家に使いやすい体系に整理できた。研修面では、これまでになかった目標達成型の灌漑普及員研修コースを定着させ、230人余の認定普及員を育てたのに加えて、各県既研修者が主導する自立発展完結的な研修実施サイクルが整備された。普及活動面では、灌漑普及員により研修受講の成果を活かしたモデル普及活動が繰り返され、近代節水灌漑普及に相応しい普及活動サイクルが定着された。また、灌漑早見盤をはじめとする農家向け節水灌漑ツール類や普及コンテンツ(多様なポスターやプロシヤ等)が残され引き継がれるとともに、各灌漑普及員やカウンターパートに対して、「その改善や新規開発のノウハウ・取り組み方」を浸透させた。



DEITEX プロジェクトの研修風景



DEITEX プロジェクトのフィールドデイの一コマ

DEITEX では様々な教訓を得た。下の DEITEX ロゴはシリアでは相当に定着している。それは、同ロゴが「DEITEX が水問題に取り組んでいること」と直結しており、住民に受け入れ易さがあつたと考えている。その背景には、やはり住民一人一人に「水問題を切実と捉えるニーズの高さ」があつたと実感する。「プロジェクトの成否は、その取り組みテーマの切実度、危急度に大きく左右される」は、今回の教訓の一つである。



DEITEX のロゴ

シリア普及員は、「節水灌漑を普及すべき技術・情報がない」、「やり方がわからない」、あるいは「自信がない」という状況にあつたが、DEITEX の実践的な研

修受講を土台にして実践的な普及活動展開を始めている。DEITEX の、[研修テーマの吟味]→[普及員研修実施]→[研修受講普及員による普及活動]→[農家への普及達成]とする活動サイクル(両者を関連づけた目標達成型研修・普及方式)の導入成功は、大きな学習でもある。

もともと「プロジェクト」とは、既存の担当組織では十分でない機能を期間限定的に補完したり、既存組織間の枠を横断的に貫く串刺し機能の発揮などが期待されている。DEITEX の進める「普及による灌漑の節水化」は、関係する各機関や関係者との連携を抜きにしては成り立たない。幸いにして研究、研修、普及各部門間の連携が思いのほか進み、とかく行政組織間の交流が薄いシリアでは今までにない好連携例となった。それはカウンターパートに恵まれたことも大きいし、また各組織・構成員の存在意義を極力貶めないとする団員の配慮なども無関係とは言わないが、本来のプロジェクトが持つ「横串機能」を積極的に活かしたことも大きな勝因と考えている。DEITEX の進めた関連組織間の連携の進展からは、プロジェクト実施ならではの「各関連機関を自由に動ける」「各関連機関を繋げる」等の効用を、一つの教訓として改めて実感した。

DEITEX は、上記の仕組みの定着に加えて灌漑普及員同士の交友と連携につながる「灌漑普及員協議会」の運営も開始した。「終了後も持続し拡大していくプロジェクト活動であつたか?」、これはプロジェクトの意義と成否を端的に示す視点である。その意味から言えば、必要な道具立てやシステム、人材は準備できた、今後の持続的展開および進展が大いに期待できる DEITEX であると思う。

いかなるプロジェクトでもそうであるように、DEITEX でも成功や上首尾ばかりではない。試行錯誤の連続であつたといつてもよい。しかし、結果的には DEITEX は失敗ではなかつたし、上記の諸点のみならず多くのことを学ぶことができたと考えている。

伝え聞くシリアの現状は悲惨である。灌漑農業の停滞が長引いており、壊滅的な地域もあると聞く。長年積み重ねてきた灌漑農業の経験と蓄積の上に、さらなる効率的な灌漑農業を目指す DEITEX であつた。これまでの灌漑農業が破壊されているとすれば、DEITEX の目標は険しくなっているかもしれない。復旧という追加のプロセスが必要になるかもしれない。いつ事態は収拾するのか。DEITEX 関係者一同、心の休まらない日々が続いている。(2012年8月松島)